

人間関係の教育・実践と研究を再考する

当センターは、その前身である、南山短期大学人間関係研究センターが設立された1977年から、人間関係の研究、および、人間関係を体験から学ぶための方法である、ラボラトリー方式の体験学習の実践と研究を推進してきました。来年度は設立から数えて40年目となります。その間、時代が変わり、環境も変化しました。今はVUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の時代と言われ、先が予測不能なカオス状態の世の中であるとされています。そのような時代の中で、求められる組織像や人材像も変化してきています。このような状況の中、人間関係の実践や研究、ラボラトリー方式の体験学習の実践や研究についても再考し、変わる必要があるものは革新していく必要があります。

当センターの研究員のメンバー構成も変化してきています。当センターにおいて、これまで受け継がれてきたDNAを大切にするとともに、若い世代の感性や価値観からさまざまなことが再考され、対話を通して創発が生まれることが必要とされています。「再考」は、同質性の中からは生まれにくく、また、個業化している関係性からは生じません。違い（異質性）と協働から「再考」は生み出されます。実践の仕方や研究のアプローチ、感性や考え方、教育観や人間観の違いについて、対話を通してともに探求し、再考し、意味づけし、新しい発想やアイデア、洞察が共創されるような関係を、当センター内で今後も育んでいきたいと考えています。

当センターは、人間関係について体験から学ぶ方法である、ラボラトリー方式の体験学習を中心とした公開講座の開催や実践研究を通して、人間性豊かな社会の実現に貢献することを目指しています。本号の特集「人間関係再考」には、当センター研究員による、ラボラトリー方式の体験学習に関する3つの論文が掲載されています。これらの研究は、2016年度にセンター研究員による共同研究の可能性について対話を行い、その結果として実施された定例研究会の内容が基になって、論文として結実したものです。また、他にもセンター研究員やそれ以外の方からの投稿論文、3つの公開講演会の記録など、充実した内容となっています。特に、メアリー・アン・レイニー氏、谷崎重幸氏、中原淳氏による公開講演会の記録は、関係づくりやチーム・組織づくりについて再考するきっかけを与えてくれる貴重なものです。

当センターは、広く学際的視点に立った人間関係研究を行い、その成果を積極的に公表するとともに、公開講座の開催などの実践を通して、人間性豊かな社会の実現に貢献することを目指しています。そして、人間関係研究の実施とその成果の積極的な公表は、本紀要を出版することで具現化されています。当紀要をお読みいただき、人間関係やラボラトリー方式の体験学習、組織開発などについて再考していただくきっかけになることを、そして、このVUCAの時代の中で、人間性豊かな組織や社会の実現に向けた、さらなる実践につながっていくことを願っています。

南山大学人間関係研究センター長 中村和彦